

第14回 多核種除去設備等処理水の取扱いに関する小委員会

廃炉事業に必要と考えられる施設と敷地



2019年9月27日

東京電力ホールディングス株式会社

貯留水タンクの建設計画

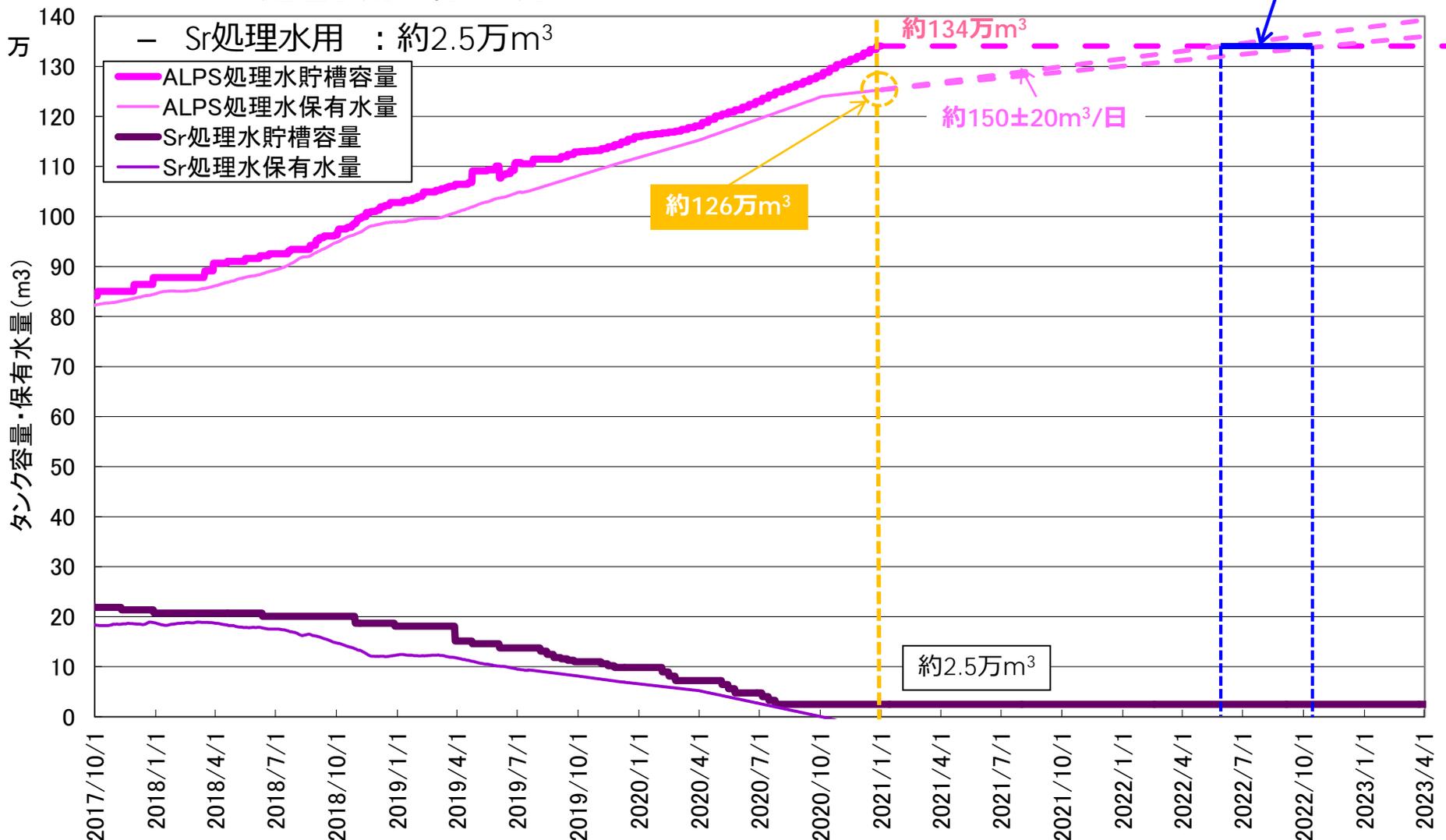
2019/8/9「多核種除去設備等
処理水の取扱いに関する小委員会
(第13回)」資料4-2より抜粋



- 2020年12月末までに約137万m³の溶接型タンク容量を確保予定

- ALPS処理水用：約134万m³

- Sr処理水用：約2.5万m³

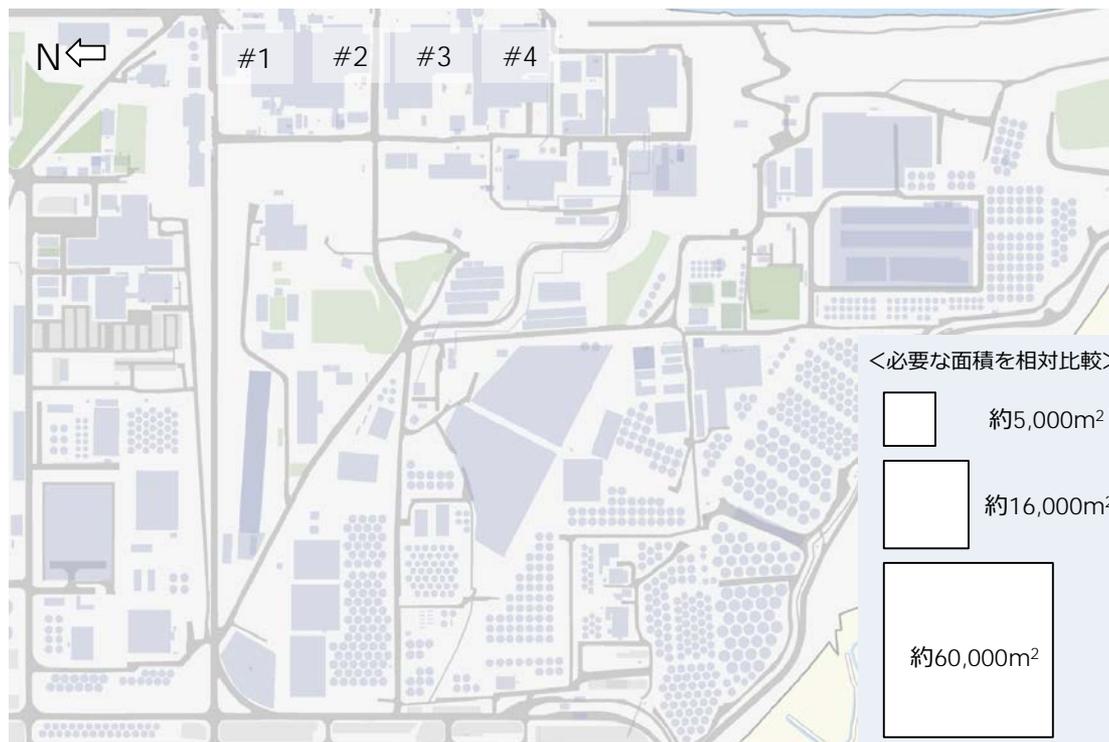


① 多核種除去設備等処理水を貯留するためのタンク
(処理水の発生に応じ)

②-1 使用済燃料や燃料デブリの一時保管施設

- 乾式キャスク一時保管施設：約21,000m² (2020年代前半)
 - 1~6号機使用済燃料プール用：約5,000m²
 - 共用プール用：約16,000m²
- 燃料デブリ一時保管施設：最大約60,000m² (2020年代後半)

計 約81,000m²



②-2 今後具体化を検討する施設（遅くとも2020年代後半）

施設	必要な時期	理由
さまざまな試料の分析用施設	2020年代前半	分析能力の強化のため
燃料デブリ取り出し 資機材保管施設	2020年代前半	デブリ取り出し装置の メンテナンスのため
燃料デブリ取り出し モックアップ施設	2020年代前半	デブリ取り出し装置の 事前確認のため
燃料デブリ取り出し訓練施設	2020年代前半	デブリ取り出し前の 訓練のため
燃料デブリ・放射性廃棄物 関連の研究施設	2020年代後半	本格的なデブリ取り出し で得られる知見の研究
廃棄物リサイクル施設	2020年代後半	廃棄物の減容、 再利用のため
廃棄物一時保管エリア	2020年代後半	至近10年以降の 廃棄物保管のため
事故対応設備保管施設	2020年代前半	事故時に用いた設備が 朽ちないように速やかに

－ 今後、廃炉事業の進捗に従って必要な施設を検討する

- 貯留水タンクエリアの効率化（フランジタンク解体跡地の活用）、廃棄物処理作業の進捗等により、空き地ができる可能性がある。
 - ✓ 敷地南側：
1～4号機に近いこと、貯留水タンクエリアの効率化（フランジタンク解体跡地の活用）による敷地の確保等により、必要なタンクの増設や使用済燃料及びデブリ関連施設等、1～4号機の廃炉・汚染水対策のためのエリアとして活用していきたい。
 - ✓ 敷地北側：
廃棄物置場が空き地となるのは早くても2020年代半ば以降であり、将来的にも廃炉作業に伴い追加的に発生する廃棄物を処理・保管するエリアとして活用していきたい。
- 現在の福島第一の敷地内で廃炉作業をやり遂げることが基本方針であり、敷地を広げることはリスクの存在地点が広がることから望ましくないと考えている。